

銀

賞

『悠久の手紙』

悠久の手紙

兵庫県 神戸星城高等学校一年 真弓璃子

ぼくが不思議な文通を始めたのは、中学一年生の秋だった。帰宅部だったぼくは、授業が終わるとすぐに帰路についていた。生徒はほとんどみんな部活に行ってしまうので、ぼくが帰る時間帯の昇降口はいつも閑散としていた。夏休み明けでまだ暑い季節だったので、誰も見ていないのをいいことにシャツの第二ボタンを外しながら、靴箱を開けた。

目に入ったのは、『ぼくのスニーカーの上に鎮座している、一通の手紙だった。』^{ちんざ}コピー用紙よりも少し分厚く、
やがてしてくる。ひっくり返しても名前はない。^{おなまえ}恐々開いてみると、

『どうしていますか』

幼児のような拙いひらがなで、それだけが書かれていた。差出人も宛名もない。もしかしたら、間違つて入れたのかもしれない。

無視してもよかつたのだが、この手紙の送り主は、再びぼくの靴箱を覗くだろう——そんな確信が、なぜかあった。不自然な引力だった。ぼくは適当なノートをリュックから引っ張り出し、端を破いてこう書きつけた。

『届いてますよ』

靴を履き替え、そのメモを上履きの上に乗せて、ぼくは校舎を出た。やっぱり友達のいたずらだったかも、と不安に思つたが、翌朝登校して、それが杞憂だったことを知つた。靴箱のメモが消えて、代わりに昨日と同じ封

筒^筒が入っていたのだ。ぼくは誰にもばれないように、ポケットに手紙をねじ込んだ。自分の教室がある二階まで二段飛ばしで駆^駆け上^上がり、席に荷物を置いて男子トイレに駆け込む。

手紙は昨日のよたよたしたひらがなとは対照的に、鮮^鮮やかな筆記体の英語——恐^恐るべ——で書かれていた。内容はさつぱりだ。

どうしよう、と思いつかぬなく、ホームルーム前の予鈴が鳴る。手紙を封筒^筒と、丁寧^{ていねい}に二つ折りにして、ポケットに突っ込む。

そのまま授業はずっと上の空だった。

家に帰ったぼくは着替えるよりも先に、スマホで手紙の写真を撮^撮った。写真から文章を読み取って、翻訳^{ほんやく}してくれるサイトを開く。

その手紙にはじりやが、英語で「こんなこと」が書いてあるひしかつた。

『あなたのポストと私のポストとを勝手に接続したことを許してください。私はあなたとは違う星に住んでいます。もし、この手紙を受け取ったなら、また返事が欲しいです』

いたずらにしてよくやきた手紙だな、と、ぼくは返事を考え始めた。別に、誰かのいたずらでもよかつたのだ。日常の繰り返しに、こんなおどき話のようなことが起^こるなんて。

ぼくは英語は得意ではない。考えた内容を翻訳サイトに入力し、それをそのまま、破つたノートの一ページに書き出す。

『あなたはどうして住んでいますか？　ぼくは地球という星です。あなたはなぜ地球の言葉である英語を話せる

んですか？ ポストを繋げたというのはどういうことですか？ あなたは誰ですか？ 「返事待つてます」

ぼくは手紙を四つに折って、忘れないように、制服のズボンのポケットに突っ込んだ。

翌朝、ぼくは、書いた手紙をスニーカーの上に置いた。放課後には返事が来るだろうか。授業が終わってすぐに昇降口へ行くと、スニーカーの上に、また封筒が乗つかつていた。家に帰つて写真を撮り、翻訳サイトを開く。

『「めんなさい。私は名乗ることができない。」「めんなさい。私はこの言語を、ある人間から教わりました。地球から来た彼は私達の言葉を学び、私達とコミュニケーションを取り、私達の言葉で、私に地球の言語を教えてくれました。私のポストは、彼にもらったものです。宇宙空間の中で、指定した座標にものを送ります。私はでたらめな座標を指定しました。だから、返事が来ると思っていました。あなたは私の隣人です。どうかこれからも、手紙を続けてください』

その手紙からは何か、ある種の切実な運命を感じられた。どうにもそんなことは書いていないのに、なぜか、送り主は孤独なのかもしないという考えが頭の中を巡つては消え、また現れる。広大な宇宙で、相手の言う「でたらめな座標」が指示したのがぼくの靴箱だったことに、意味はないかもしないが、意味のあることだけが運命ではないだろ？

『わかりました。手紙を続けます。ぼくたちは会つことはできないかもしないけど、隣人です。あなたの星のことを色々と教えてください。返事を楽しみにしています』

ぼく達の文通は、翻訳サイトを介して続いていた。朝、手紙を靴箱に入れておくと、夕方にはもう返事が来ている。持ち帰つて返事を考へ、翌朝また手紙を靴箱へ……そんなサイクルがしばらぐ続いた。

彼（性別さえわからないが、この先、送り主のことは便宜上こう呼ぶ）の星は、想像もできないほど遠くにあらしかつた。彼に英語を教えた人物はもう亡くなっているらしい。その人がなぜ彼の星まで行くことができたのかは彼も知らないようで謎のままだつたが、近況や、お互いの星のこと教え合うのは、重大な秘密を抱えているようで楽しかつた。

あるとき、彼が自分の星を「美しい水と、空と、色とりどりの花と、争いのある星です」と表したことがある。ぼくが彼に孤独を感じた理由が、そこに詰まつている気がした。

葉がもうすっかり色つき、本格的に秋めいてきたある日、ぼくだけの秘密の文通は、たつたの三週間で終わりを告げた。

いつものように靴箱に手紙が入つてゐることを確認したぼくは、周りに誰もいないのをいいことに、その場で手紙を開いていた。紙にびつしり並べられた流麗な文字列を見て、ニヤニヤしていたのだ。

「なんだか嬉しいですね」^{うれ}と、横からかけられた穏やかな声に驚いて、ぼくは手紙を取り落とした。紙がひらひらと舞う。

「あっ、ごめんなさい。驚かせましたね」

手紙を拾つたのは、隣のクラスの担任である、大西先生という中年の女の先生だつた。担当教科は英語だ。優しくて授業も面白いので、一部の生徒からは「おおにつちゃん」と呼ばれているほど、人気のある先生だつた。声をかけられるまで、気配にすら気づかなかつたことを反省しながら、手紙を受け取つとして、ぼくは動き

を止めた。大西先生が目を丸くして、手紙を凝視していたからだ。

先生はしばらく手紙を見て「これ、君が書いたんですか?」と顔を上げた。ぼくは誤魔化せないといふことを悟つて正直に書いた。

「ええ、違います。文通してるんです」

「文通? ……英語で?」

「はい」

ぼくは事の一切を先生に話した。先生は時折頷きながら黙つて聞いていたが、ぼくが話し終えると「それ、先生にもお手伝いやしてくれませんか」とぼくに笑いかけた。

「お手伝いするの? 翻訳機を使わずに返事を考えてみませんか。英語の勉強にもなりますよ、きっと」「……ぼくにできるでしょ?」

うーん、最初のうちは大変かもしませんが、君は部活もやつていませんし……いえ、無理にとは言いませんが……秘密の文通、先生も興味があります。どうです?」

ぼくは頷いた。挑戦したい。少し面倒くさいけれど、その方が気持ちも伝わる気がする。

先生は満足そうに「ありがとうございます」と再び笑った。ぼくだけの秘密の文通は、ぼくと先生、一人だけの秘密の文通になつたのだ。

ぼくと先生の秘密の手紙講座は、授業が終わつた後、図書室で行われることになつた。放課後の貸し出しチケットは図書委員会の顧問である大西先生の担当なので、人目につかない場所を、と先生が提案してくれたの

だ。

大西先生が今までの手紙を見させてくれと囁いたので、文通のことがばれた翌日、計十三通の手紙を先生に手渡した。

ぼくの向かいの席で、十三通分を黙々と、しかしじつは「ポスト」と読んでいた先生は、最後の一通を読み終えてふと顔を上げ、首を傾げた。

「君の靴箱が、送り主の『』の『ポスト』の代わりといつていいよな?」

「そうだと思います」

「不思議なものもあるのですね」

話を続けるのを少しだけためらう。素振りを見せてから、先生はぼくから田をそりして、うつむき笑った。
「悪いけど、君は、英語の成績はあまりよくありませんよね」
「そんなんにはつきり言わないでください」

「あはは、うめんなやう。いや、手紙を書くついに成績なんてポンと上りますよ。来年は受験生ですし、頑張りましょーね」

頷く。そうなのだ。来年は受験生だから、もしかしたら、手紙を書く暇なんてなくなるかもしない。そもそも靴箱がポストである時点で、ぼくが中学校を卒業したら、嫌でも文通は終わる。ぼく達は刹那の隣人だった。その日は先生に文法や単語を教えてもらしながら、いつも手紙を書いた。

『ぼくは英語が得意ではありません。実は今まで翻訳機を使っていました。でも、今日からは、英語の先生に教えてもらっているながら、自力で文章を書くようにします。読みにくくなると思いますが、よろしくお願いします』

消しては書いて繰り返したので、紙はよれたし、墨すんでいたし、書くのに一時間もかかった。しかし、先生が「いいと思いますよ」とお墨付きすみつけをくれたので、自信は持てた。
手紙を靴箱に入れて校舎を出る頃には、もう五時を回つており、口も傾き始めていた。いつもより頭を使つたはずなのに、疲れてはいない。ぼくは足取り軽く、帰路についた。

彼は、ぼくが自力で手紙を書くというのを聞き、「これからあなたの心からの言葉が聞ける」と嬉しく思います」と喜んでいた。

それからは今までのサイクルが逆になつた。放課後、ぼくが先生と一緒に手紙を書いて靴箱に入れておくと、翌朝に返事が届いている。初めの頃は違和感いわかながあつたが、半年もすればその違和感はすっかりなくなつていた。
四月、ぼくは順調に三年生になつた。担任は一年生の時と同じで、大西先生はまた隣のクラスの担任だ。靴箱は三年間同じ場所を使うので、文通は続く。

ぼくは進級した日の手紙にこう書いた。

『ぼくは今年、大切な試験があります。そのための勉強をするので、今までのよつたペースでは、手紙を出せないかもしません。でも、できるだけ返します。なので、これからも手紙を送り続けてくれると嬉しいです』
一年後にはもう、ぼくは中学校を卒業するので、文通はできなくなります——それは言わなかつた。先生は「早く言つたほうが、自分も相手もショックを受けずには済みますよ」と言つたが、ぼくは意志を変えなかつた。
まだ先なんだから、伝えるのはもつと後でいい。そう思つていたからだ。
そして、翌日、返事は来なかつた。

春休み中は毎日学校に来る」ことができず文通が不定期になっていたので、その名残だろうと特に気にしていたがつたのだが、返事は何日経っても来なかつた。怒つたのだらうか。

手紙を送つてから一週間後の朝、靴箱を開けたぼくは、ほっとした。手紙がある。放課後をあれほど待ち遠しく感じたのは初めてだった。封筒には便箋以外の何かも入つてゐるようで、普段より重く、そして膨らんでいた。放課後、図書室でいつものように先生と向かい合つて、手紙を開封する。

『そりなんですね。あなたの試験が成功することを心から願つています。お守り代わりと言つてはなんですが、星の石を送ります。これを渡すために探し回つていたら、返事が遅れてしまひました。『めんなさい』

どうやら、怒つてはいないうしい。それどころか、プレゼントも貰つてしまつた。

封筒から、便箋といつしょに滑り出た「星の石」は手のひらサイズで、青い半透明で、「ひつひつしていた。蛍の光灯の光を反射して、キラキラと光る。先生は子供のような表情で「こいなあ」と、うつとり石を見つめた。「宇宙から来た石ですよ。大事になさい」

「はい」

ぼくは素直に頷いた。今まで貰つたどんなプレゼントよりも嬉しかつた。

今日の手紙は石のお礼と、受験のこととを書いていた。そう思つて、ペンケースを漁つてみると、先生が「あれつ」と声を上げた。

「これ、続きがありますよ。一枚目が」

えつ、と声が漏れる。そんなこと、初めてだった。なんだか嫌な予感がする。

『おうか迷つたのですが、あなたには打ち明けます。実は先日、召集命令が私に届きました。戦争です。無む

駄な争いです。私は行かなければいけません。あなたと同じように、私もまた、手紙を出す頻度は落ちるでしょう。でも、あなたも送り続けてください。あなたの手紙は、きっと私に勇気を与えます』

彼の言つた通り、彼から手紙が来る頻度はぐっと下がつた。それでも、ぼくはできるだけ手紙を書き続けた。夏になると、塾に通い始めたり、高校の見学会に行つたりするようになつた。日常は穏やかに通り過ぎていつた。ぼくの生活の様子なんて、そんな脳天氣なことを書いていいものかと思つたが、彼は言つたのだ。ぼくの手紙が、彼に勇気を与えると。だから、どれだけ彼のことが気になつても、いつもと調子が変わらないように心がけた。

蒸し暑い夏の朝、やはり靴箱に返事が来ていないことに寂しさを覚えながら、いつものように登校すると、なんだか教室が騒がしい。先に来ていた友達の肩を叩き、何があつたのかと尋ねると、そいつは興奮気味に「おおにつちゃん倒れたんだって！」と叫んだ。

そのときぼくがくらつとしたのは、夏の暑さのせいばかりではない。

大西先生は学校に来なくなつた。病を患つたそうだ。しばらく入院して療養する、という話を集会で学年主任から聞かされ、代理の英語の先生が紹介された。若くて綺麗な女の先生だつた。友達はみんな、新しい先生に英語を教えてもらひたいことを喜んでいた。手紙のことを話そうか迷つたが、言わなかつた。

一人では図書室に行く気にもなれず、久々に真っ直ぐ家に帰つたぼくは、お母さんの「あれ、今日は早いね」という言葉に、うん、とも、ううん、ともつかないような返事をして、自分の部屋に入った。

彼の星では、戦争が激しくなつてゐるらしい。手紙は、一ヶ月に一度、届くか届かないかの頻度になつていった。なかなか家に帰れないのだそうだ。彼の家族か機械か、誰が回収しているのかはわからないが、それでも手紙は毎日回収される。その事実だけが、「ぼくと彼とを繋ぎ止めてくれた。たまに届く彼からの手紙に近況が書かれること」はほんとうでなく、ぼくの手紙に言及する内容ばかりだった。それでもよかつた。生きてやがれてくれれば。

ぼくの手紙は、どれだけ彼の支えになれただらうか。彼はぼくの手紙を待つてくれている。なりば、ぼくが顔も知らない彼に「できる」とはただひとつ、手紙を書き続けることだ。

季節はぼくを乗せて、止まる「ことなく進む。いつしか文通を始めて、一年以上が経つていた。冬、受験が近づいて、みんなピリピリしていた。ぼくは勉強の合間を縫つて手紙を書いた。受験勉強で英語に苦労させられずに済んだのは、そのおかげだらうか。

季節は進む。止まる「ことなく」。ぼくは受験に合格した。合格したことを中学校に伝えに行くと、担任の先生はとても喜んでくれた。大西先生のことを聞くと、先生は首を傾げて「あまり思わしくないそつだ。なんか、手術がどうとか」とあやふやな返事をぼくにくれた。先生も、詳しきは知らないらしい。

「あの、図書室つて開いてますか？」

図書室に来るのは半年ぶりだ。大西先生の代わりに、ベテランのおじいちゃん先生が貸し出しの担当になつて

いた。カウンターに会釈をして、お気に入りの席に腰を下ろす。ペンケースと便箋を机の上に広げる。

『お元気ですか、ぼくは元気です。最近手紙を書いていなくてすみません。

試験に合格しました。あなたがくれた石のおかげです。星の石が、どんなときもぼくを勇気づけてくれています。あの石が、あなたの代わりにぼくを応援してくれているような気がしていました。

実は、もうすぐぼくは、あなたとの文通を終えなければいけません。新しい環境に進むからです。ぼくのポストは、新しい人が使うことになります。次の人があるあなたの手紙に返事を書くかどうかはわかりません。

あなたの手紙の内容は知らないことばかりで、とても楽しかったです。嬉しかったです。名前も声も知らないけれど、それでもぼくは、あなたのことを友達だと思っています。

今までありがとうございました。感謝の気持ちを込めて、地球の花を送ります。

あと少しの間、よろしくお願ひします』

ぼくは封筒に便箋と、いつの間にか咲いていた梅の押し花のしおりを入れて、封をした。

大西先生は卒業式に来なかつた。

その日は小雨^{はな}が降つていて、咲き始めたばかりの桜の花を散らしていた。三年間廻^{はな}した校舎と別れるのも、友達と進路^{はな}が離れるのも悲しかつたが、それ以上に、ぼくは手紙の返事が気になつた。今日で最後なのだから。押し花を送つた後、返事は一通も来ていない。でも、ぼくは、ほとんど毎日手紙を書いて、彼に送つた。たかが紙切れ一枚だが、されど紙切れ一枚なのだ。それはぼくだけでなく、彼にとつても同じだつただろう。

昨日も、手紙は送つた。返事は来ているだろうか。最後だからと教室で騒ぎ立てる友達をよそに「親^{おやぢ}が待つて

るから」と嘘をついて、ぼくは一人でそつと教室を抜け出した。

昇降口への階段を駆け下り、靴箱を開ける。

思わず息を呑んだ。

手紙が入っている。

震える手で触れてみると、やはりざらざらしていた。裏返しても勿論、名前はない。鼓動がどんどん早くなって、顔が熱くなってくる。辺りはしんと静まり返っていた。破いてしまわないように、ゆっくり開封する。そこにいつものしなやかな筆記体の文字列はなく、ただ、短い言葉だけが並んでいた。

ぼくは便箋を封筒に戻し、潰れないように、丁寧に鞄に入れた。

卒業式から帰つてしまい、ぼくはすぐ便箋を出した。大西先生に手紙を書いた。

遠い遠い星に送った手紙は、時空を超えて、彼を助けただろう。彼がぼくを支えたのと同じように。なりばもつと近く、手の届くところにいる人にも、ぼくは力を渡せるはずだ。

ぼくは不思議な運命を持つている。誰かを支える力を。ぼくだけではない。生きているもの、宇宙に存在しているもののすべて、不思議な引力を持つているのだ。時に離れてしまうことがあるても、いつか必ず再び会う日がきつとまた会える。そう信じている。

最後の手紙には、震えた小さな日本語で、これだけが書かれていた。

あなたの返信に
心より感謝を
ありがとう
いちばん遠い
友人よ

銀
賞